

「1 年生の花壇 (2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

初夏の 1 年生の花壇。作物の成長は驚くほど速い。どこのクラスでも人気があったのが「キュウリ」だ。



雌雄異花のウリ科の植物は、雌花に最初から小さな果実がついている。キュウリも開花前から、「超ミニサイズのキュウリ」がついている。しかしこの時点では、1 年生は気づかない者が多い。キュウリはヘチマやスイカと比較して、雌花の比率が高いため、次々と収穫できるのが素晴らしい。



花が萎える頃には、もう誰が見ても「キュウリ」とわかるようになる。実が小さいうちは、周囲にトゲがたくさんついている。



このトゲは「刺毛」と呼ばれ、未熟な実を外敵から守る役割をしているようだ。キュウリは完全に熟すと、ヘチマのように大きく黄色くなり、刺毛も消失する。日本人は未熟なキュウリを食用にする習慣があるので、まだ刺毛が残っていることが多い。

種子から育てても良いのだが、苗を購入すれば、およそ一ヶ月は節約できる。夏休み前に収穫を始めたかったので、今回は苗から育てることにした。キュウリの大敵は「うどん粉病」である。最初、ホームセンターで「うどんこつよし」という品種の苗を買ってきたが、これは値段が高い割には、あまり元気がなかった。ホームセンターの向かいの花屋さんのものは、5ポットで550円の激安なのに、非常によく育っている。



最初はあまり関心を示さなかった 1 年生の子どもたちも、花や実がつくと、興味津々のようだ。休み時間も観察したり、水やりをしたり、更にダンゴムシを捕ったりと、花壇の周囲はいつも賑やかだ。